

Dann schliefe ich noch mehr nicht - Überlegungen zur 17-Silben-Übersetzung des Haiku

ドイツ語圏で名のある出版社 Reclam が、1995 年と 98 年に Jan Ulenbrook 氏が翻訳した俳句集をそれぞれ出版した。これら 2 冊の俳句集は、もともと 1960 年頃出版されたものであるが、今回の版は訂正されることなく、そのまま再出版されたものである。再出版という事態はよくあることで、別に問題はない。しかし、筆者の邪推かもしれないが、日本語に十分に精通していない Ulenbrook 氏の翻訳した俳句集、それも初版以来専門家に批判され続けている俳句集を再出版したことは考えものである。氏によって翻訳された俳句を、詳細に分析すると、さまざまな問題点が浮かび上がる。一番問題であるのは、日本詩学における五・七・五という伝統的な規則をドイツ語の翻訳に当て嵌めるという試みである。

本論は五・七・五リズムがドイツ語に翻訳可能かどうか、可能であるならばその必要性があるか、という問題に焦点をおき、さまざまな翻訳された俳句を比較する試みである。そこで、俳句のリズムを翻訳においても遵守する必要性を主張するドイツ語・英語圏の翻訳家達が提示する証拠を引用すると同時に、Ulenbrook 氏が、その五・七・五リズムをどのようにドイツ語へ翻訳しているかを検討した。その結果、氏が今まで存在しない言葉さえもつくりだし、文法が通じなくなるまでの勝手な方法での使用、言葉の意味がおかしくなるような言葉の配列が明らかとなった。

もちろん、五・七・五リズムを翻訳においても遵守する姿勢を示しているのは Ulenbrook 氏一人だけではなく、日本古典文学を教える教授達の中にも、その規則を守る必要があるとする翻訳家は少なくない。しかし、Ulenbrook 氏の翻訳にみられる、美しさが失われたドイツ語の使い方は、立場を同じとする他の専門家の翻訳において見だし得ないのである。とは述べたものの、これらの専門家達の俳句翻訳を詳しく比較すると、傾向として、五・七・五リズムの遵守を必要としない翻訳家達による俳句翻訳の方が納得できるのである。

筆者が Goethe-Institut の翻訳コースにおいて行った実験で明らかになってきたのは、俳句の翻訳を初めて試みた学生でも、日本俳句のリズムをドイツ語においても表現できるということであった。もちろん推敲すべきところが数多くあったが、翻訳初心者の彼らに、五・七・五リズムの翻訳が可能であるならば、どうしてドイツ語のプロ翻訳家による作品には、問題的な句訳が多いのであろうか。おそらく、日本俳句の特徴を、ドイツ語に翻訳された俳句においてもそのまま表現しなければならない、という考え方に根付いているからであろう。その結果、ドイツ語本来の言葉の使い方の自由さを失っ

ているのであろう。

ひとつの筆者の要求が許されるのであれば、Ulenbrook 氏の句集のように、現在にいたるまで批判されてきた翻訳の再出版を企画する際は、翻訳理論あるいは日本古典文学を研究したりする専門家達の提案に耳を貸してくれれば幸いである。それは翻訳家だけに対してではなく、出版社への願いでもある。